

Wesley Hall News



おーる あおやま あーとてん 2006
テーマ「創造の完成」

青山学院スクール・モットー

地の塩、世の光
The Salt of the Earth, The Light of the World

(新約聖書 マタイによる福音書 第5章13～16節より)

No. 89

2006. 9.20.

特集 アジアに目を向けて

- 説教「良い知らせを伝える者の足は」 伊藤 勝啓... 2
- 青山学院CFJフィリピン訪問プログラム 伊藤 悟... 4
 - アジアに目を向けて 西田恵一郎... 7
 - 遠い国のお友だち～CFJの活動を通して～ 久 洋子... 8
- バンラデシュ寺子屋訪問スタディツアー 輪島 達郎... 9
- 高等部グリーンキャンプ in アジア学院 渡辺 健... 10
- キリスト教図書紹介『迷っているけど着くはずだ』..... 平尾 雅人... 11
- 青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料 その16 ... 氣賀 健生... 12
- 私の教会 日本キリスト教団 中渋谷教会 野宮 恵... 14
- 宗教センターだより 15

説 教

「良い知らせを伝える者の足は」

ローマの信徒への手紙 第10章14-15節



伊藤 勝啓

女子短期大学宗教主任

はじめに

キリスト教はイスラエル宗教の伝統を受け継ぎ「神の支配」の良き知らせを世界に告げる使命を与えられました。主イエス・キリストご自身による宣教活動は、ペンテコステを契機に使徒たちに引き継がれていきました。そしてマタイ福音書にあるように、復活された主イエス・キリストは福音宣教の大命令を弟子たちに与えられました。弟子たちは主イエス・キリストの使徒として宣教活動の第一線に立ちますが、それは「命令」としてだけではなく、「宣教」において彼らの信仰と喜びを言い表すことができたのです。

ところで、プロテスタント教会が世界宣教に積極的に関わるようになるのは、ドイツのハレにおける敬虔主義の活動によるものでした。海外宣教ということにフランケとその仲間たちは目覚めていました。このことは当時のプロテスタント教会には一般的なことではありませんでした。1705年末、デンマーク王フリードリヒ4世(1699-1730)は自国領のインド南東海岸のトランケバルに宣教師を送り、1706年7月9日にその地に足を踏み入れました。その宣教師たちとは、ハレで教育を受けたバルトロメウス・ティーゲンバルク(1682-1719)とハインリヒ・プリュチャオ(1677-1746)の二人でした。18世紀にこのハレから80人に及ぶ宣教師たちが海外へ送られたのです。また、敬虔主義の影響を受けたツィンツェンドルフ伯と彼の指導を受けたモラヴィア兄弟団も海外宣教の義務にめざめていたのです。ツィ

ンツェンドルフ伯は自らアメリカに赴き、アメリカ・インディアンへの宣教を行いました。アメリカ・インディアンに対するモラヴィア派の宣教師の中には、1740年からジョージアのクreek族、1743年から死に至るまでイロクォイ族の働いたダーフィット・ツァイスベルガー(1721-1808)がいます。

このようにプロテスタントの海外宣教の働きはやがて大きなうねりとなって18世紀のアメリカのキリスト教界にいわゆる「大覚醒」をうむ土壌を形成します。このアメリカから海外に多数の宣教師たちが送られることになりました。わたしたちの青山学院もこの運動と深いつながりがあります。日本や中国を含めアジアの国々にたくさんの宣教師たちが送られてきたのです。彼らは使命感に満ちていました。若くしていのちを絶った人たちもいます。彼らは教会を建て、学校を建て、医療・福祉の仕事の先駆けとなりました。

使徒パウロの場合

パウロはガマリエル門下の律法学者として将来を嘱望されていました。彼はクリスチャンを摘発して分遣隊に渡し、エルサレムに連行する活動をしていましたが、ダマスコ途上、突然の光りを浴びて地に倒れ(使徒言行録9:3-4)、復活の主イエス・キリストの御声「なぜ、わたしを迫害するのか」を聞きました。これはパウロの回心の体験でした。彼はその意味を尋ねること14年、ついに異邦人の使徒として姿を現しました。異邦人が主イエス・キリストの福音

を受け入れ、神への眼差しを発見し、新しく生きることにその生涯をささげることになりました。それはパウロにとって二重の喜びとなりました。異邦人への使徒へと召されたこと、それは同時にイスラエルの救いに関わることの喜びでした。なぜなら、イスラエルという彼にとっての「肉による同胞」のためなら自分の身が神から見捨てられてもよい、とさえ思っていたからです。異邦人の使徒とされ、異邦人が救われることによって、ついには同胞のイスラエルが救いにあずかることができるようになる、そう確信できたからです。その経緯はローマの信徒への手紙9章から11章までに述べられています。それゆえ、異邦人への宣教は主イエス・キリストの大命令に合致するだけでなく、同胞の救いをもたらすいのち綱をたぐりよせる喜びを内包していたのです。

イザヤの預言を手がかりに

パウロはイザヤ書52章7節の言葉に言及します、

「いかに美しいことか
山々を歩き巡り、良い知らせをつたえる
者の足は。
彼は平和を告げ、恵みの良い知らせを伝え
救いを告げ、
あなたの神は王となられた、と
シオンに向かって呼ばわる。」

福音（良き知らせ）を伝えるわくわくするような喜びが伝わってこないでしょうか。パウロは福音が人々に伝えられ、それが信仰によって受け入れられ、そこに新しい救いの地平が開かれてゆくことに喜びを抱くのです。ですから、福音の使者の足は美しい、美しい、といわれるのです。

イザヤの預言の第2のポイントはイスラエルの回復と諸国民の救いです。そのために歓声をあげ、喜びの歌を歌え、と預言者は語ります。新しい神の民の前に神は立ち、民の後ろにも立たれる。勝利の行進は新しい世界の出現の象徴と読むこともできるでしょう。預言者イザヤは終末における勝利の行進を見ることが許された

のです。

第3のポイントは、神の僕の苦難と死を示します。それは今まで「だれも物語らなかったこと」（15b）であり、「一度も聞かされなかったこと」だといわれます。パウロは、イザヤの預言を思い起こしながら、主イエス・キリストの苦難と十字架上の死を重ね合わせたのではないのでしょうか。いまだ人が考えたことも、語ったこともないようなことが起こらねばならなかったのです。広島や長崎で起こった原子爆弾投下による悲劇の中に、母親がこどもをかばいながら死に臨んでいる場面が見られます。そこまで身を挺することなくしては、こどものいのちを守ることはできなかつたのです。イスラエルの贖い、万民の救いはあの主イエス・キリストの苦難と死なくしては起こりえなかつたことをイザヤの不思議な預言が暗示していることを初代のクリスチャン、またそれを受け継いだパウロも察したのでしょうか。

使徒パウロの省察

パウロは福音を聞いて「信じる」ことの決定的意味を伝えます。「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聴くことによってはじまるのです」（17節）。神がその民に語り続けられたこと、異邦の民にも語られたことを詩編、申命記、イザヤ書の言葉を挙げて神の言葉を聞いたことを示唆します。それにもかかわらず、人間の耳はそれを聞かなかつた。それほどまでにかたくなな人間の現実があるのです。しかし、福音を告げ知らせる者のおかげで、異邦人の中からこれに耳を傾けるものが生まれ、エルサレムに始まり、小アジア、ヨーロッパ、アジアの諸国にまでも神の民が誕生してきたのです。パウロ自身は捕われの身でありながら、なおローマに行き、さらには現在のスペインにまでも宣教の足を伸ばしたいとさえ切望するのです（15:24）。この流れに今日のわたしたち、アジア、ヨーロッパ、全世界が連なっているのです。



青山学院 CFJフィリピン訪問プログラム

大 学 2006年3月22日～31日 (9泊10日)
初・中等部 2006年3月26日～31日 (5泊6日)



伊藤 悟

大学宗教主任

青山学院の各部では数年来、個人や各部の学年やグループがチャイルド・ファンド・ジャパン (CFJ) を通じて、フィリピンの子どもたちの教育支援 (スポンサーシップ・プログラム) を続けてきています。具体的には支援のお金を送ったり手紙のやり取りを通してのサポートを行ったりしています。この訪問プログラムはそうした間接的な支援だけではなく、実際に現地の人々の生活を知ることによって、また直接的な関係を築くことによって、アジアの貧困の現状を学び、隣国の人々とどうしたら共に生きることができるのかを模索しようとして企画されました。初等部ではすでに10年前から訪問プログラムの実績があり、中等部でも何回かの訪問経験がありました。2003年度より初等部と大学の合同プログラムを開始し、2006年3月には初等部、中等部、大学によるプログラムが実施されました。今回は、各部から各4名の児童・生徒・学生に、教員5名、CFJスタッフ1名が加わって計18名の訪問チームでフィリピンを訪れました。それぞれに多くの経験をして帰国し、帰国後は各部で報告会が行われています。

このプログラムのねらい

- このプログラムは、学院内の縦の連携を見出そうとして始められたもので、学院スクール・モットー「地の塩、世の光」を具現化しようとするものです。
- この訪問プログラムは、支援先の子どもたちや地域を尋ね歩くことによって、彼らとの直接の出会いを経験し、人々の生活にじかに触れることを通じて、世界が抱える貧困の問題を自分の隣人の問題として捉えていくことをねらいとしています。
- フィリピンの文化や信仰的遺産に触れることを通じて、より広い世界観のなかで、人間の生やその意味について深く思索する機会とします。
- たんに訪問だけを目的とするのではなく、年間を通じて、「豊かさとは」「援助とは」「幸せとは」といった課題に、共に取り組んでいくプログラムです。

旅 程

	初等部・中等部	大 学
3月22日(水)		空路マニラへ、マカティでアヤラ博物館見学
3月23日(木)		長距離バスでソラーノへ、ソラーノの協力センター訪問
3月24日(金)		3つの村を訪問、マーシン村でホームステイ
3月25日(土)		夜行バスでマニラへ
3月26日(日)	空路マニラへ、到着後インファンタに向かう	日曜礼拝出席、市内見学
3月27日(月)	インファンタのセンター訪問、交流プログラム、午後マニラへ、夕方、大学と合流	パヤタス地区訪問視察、市場見学、夕方、初・中等部と合流
3月28日(火)	空路イロイロへ、カバトゥアンへの協力センター訪問、交流プログラム、大学生は市場見学	
3月29日(水)	舟でギマラス島へ、ギマラスの協力センター訪問、交流プログラム、センタースタッフと夕食	
3月30日(木)	早朝空路マニラへ、午前ダスマリニヤスの協力センター訪問、交流プログラム、夕方マニラ市内見学	
3月31日(金)	午前マニラ市内見学、午後空路成田へ	



○印は今回の訪問先
地図上の番号は協力センター所在地

CFJ と協力センターについて

- チャイルド・ファンド・ジャパン (CFJ) は、現在約4,000人のスポンサーと1,500人のプロジェクト・サポーターによって支えている国際協力NGOで、これまで30年の実績があります。
- CFJのスポンサーシップ・プログラムは、一人でも多くの貧しい家庭の子どもたちが学ぶチャンスを得、自らの可能性を伸ばすことができるようにと願うものです。
- スポンサーシップ・プログラムは、フィリピン全土25カ所にある協力センターで行われています。
- 協力センターは、現地のNGO、大学、財団や修道会などがCFJとパートナーシップをとり現地に開設するもので、スタッフが地域に住み込み、地元根ざした活動がなされています。
- 現在約5,000名のチャイルド(里子)が協力センターで支援を受けています。

チャイルド・ファンド・ジャパン

ホームページ <http://www.childfund.or.jp>

「はっきり言っておく。私の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」(マタイ 25:40)

参加者はこんな課題に直面します

- 衛生感覚、環境問題、いのちの尊厳
- 「普通」となにか。何を基準とした「普通」なのか
- われわれの援助によって、彼らがどのようなことを願っているのか
- 近代化は本当に必要なのか……「豊かさ」とは何を指すのか
- 援助する側と援助される側という分け方でよいのか
- 視察とはいったい何をすることなのか
- 里子の母親たちの流す涙はいったい何を物語っているのか
- 貧困の連鎖をどう断ち切るか
- はたして本当に『ゴミの山はぼくらの天国』……なのか
- 日本での“safe”とフィリピンでの“safe”には大きな意味の違いがある？
- 日本企業の進出や性的人的交流をどのように捉えるのか

「互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」(ヨハネ 13:35)



出発前には事前学習を行います。フィリピンの歴史・文化・宗教、人々の生活様式、CFJの支援プログラムの内容など多岐にわたる学習を行うとともに、CFJ東京事務所を訪問したり、出発前には院長室を表敬訪問したりしました。また大学生の指導で、現地で披露する歌の練習も行いました。



首都のマニラには高層ビルが建ち並びます。市場には物が溢れています。しかしその裏では深刻な貧困の問題が横たわっています。フィリピンでは貧困率が非常に高く、一日1ドル以下で生活しなければならない人々は人口の14.6%、一日2ドル以下で生活する人々は45.9%にのぼります。貧困ゆえに教育を受ける機会を失う子どもたちも多く、たとえ小学校に入学したとしても、三人に一人は卒業せずに学校を途中でやめて働いているという現状があります。そうした人々は学歴が低いばかりに安定した収入を得ることのできる職業につくことができず、フィリピンの貧困問題は悪循環を繰り返しています。



毎日多くの事柄を見たり体験したりしました。消化不良を起こさないように、それぞれに学んだものや感じたことをできるだけその日のうちに整理し、ディスカッションを通じてさらに学びを深めます。ときには各部ごとに、ときには縦割りのグループ、ときには全体でのミーティングを行いました。このミーティングが、訪問プログラムをより豊かなものにします。



大学生は一足先にフィリピンに行き、ルソン島北部の村を訪ねてホームステイを体験しました。竹や藁で作られた質素な家でのたった一泊の滞在でしたが、外国からの来村者を地域全体で歓迎してくれました。こちらからは「花さか爺さん」のペープサートを披露し、村の人々はイフガオ族に伝わるダンスや歌の数々をプレゼントしてくれました。



「旅人をもてなしなさい」という聖書の言葉を深く感じさせられた滞在でした。バナナ料理、蛇料理をはじめ、普段は食べていないであろうご馳走を私たちのためにたくさん準備してくれました。コーヒー豆を磨り潰したり、夕食用のカエルをさばいたり、水牛に乗って畑を耕したりという日常生活の一部も体験させてもらいました。



訪問する先々での地域の子どもたちや青年たちとの交流も活発に行われました。



第二のスモークマウンテンと呼ばれるマニラ校外のパヤタス地区には大学生だけが訪問しました。ゴミの山の周りで廃品を集めて換金して生活している人々が多くいます。この地域では日本のNPO団体によって栄養不良児の給食支援が行われていました。環境の悪さが子どもたちの成長を阻害しており、暴力、ドラッグ、家庭崩壊、乳幼児の高死亡率など、多くの課題を抱えている地域でもあります。しかしそれとは対称的に、子どもたちの明るい笑顔はとても印象的でした。ただし、子どもを抱いたときの体重の軽さには驚きを禁じえませんでした。



子どもたちの日々の様子です。都市部の裕福な子どもたちは、学校にも高級車の送迎つきで通いますが、農村部や貧困地域では、子どもたちは教科書やノートも何人かで共同で使うなど工夫をしながら勉強をしています。毎日の水汲みは子どもたちの仕事です。また上手に水牛を操って荷物を運ぶ子どももいます。



フィリピンの文化に触れることも今回の目的のひとつです。日本では見慣れない乗り物に乗ったり、マニラ大聖堂やフィリピンの英雄ホセ・リサール記念碑も訪れました。フィリピンには他国による長い支配の歴史やカトリック教会の古い伝統があります。また、第二次世界大戦のときに日本がもっとも大きな被害をもたらしたのもフィリピンです。

「アジアに目を向けて」

西田 恵 一 郎
中等部宗教主任

アメリカ滞在中、私は仕事柄アジア系の人々とよく接していました。帰国後もそのような機会はしばしばありました。しかし、今年の3月に行われたフィリピンの里子訪問は、私にとって今まで体験してきたアジアの人々との出会いとはまったく違ったものでした。その理由は中等部の生徒が一緒だったからです。彼女たちは、センターや訪問した学校の生徒たちと一緒にとても良い時を過ごしました。自分たちで見たもの、聞いたこと、触れたものを通して体験的に多くのことを学びました。

そのようにして彼女たちが学んだことは、私が彼女たちに学んで欲しかったこと、あるいは学ばせたかったことを遥かに超えた領域で展開されていたようでした。楽しく時を過ごしている中でも「自分たちがしている事は、単に好奇心からなのではないのか」また「援

助とは何か」などを自問自答していたのです。

私たち日本人がアジアに目を向ける時、どうしても援助する立場に立っているのではないのでしょうか。援助とは私たちが何をしたいか、あるいはしてあげたいか、ではなく、相手が何を私たちに求めているか、何を必要としているかを知り、それを実践することではないのでしょうか。そのためには、互いの違いを認めた上で、互いに率直な言葉と思いを交わすことが必要だと思います。そして「互いに重荷を担いなさい」（ガラテヤ6:2）とあるように互いに必要を分かち合うことが大切です。

アメリカ留学一年目、白人教会の日曜学校幼稚科で奉仕をしていた私は5歳の男の子に“Are you a Chinese, a Korean, or a Japanese?”と訊かれました。私が“I’m a Japanese”と答えると、彼は親近感でも覚えたのでしょうか“I’m a Chinese”とニコツと笑って言いました。私たちは同じアジア人です。仲間として、協働者としてお互いに目を向け合いたいものです。



どこに行っても子どもたちの笑顔はとても印象的です。右側の二枚の写真は幼稚園のお母さんたちのサポートするジャスティンくんとその家族です。持参した幼稚園の子どもたちからのプレゼントを手にするジャスティンくんは何となく不思議そうな顔をしていました。



今回は4つの現地協力センター(大学は6つ)を訪れました。それぞれ短い滞在時間にもかかわらず、いろいろの歓迎行事や交流プログラムを用意してくださり、充実した訪問プログラムとなりました。移動が多かったために少しばかり疲れ気味でしたが、現地の子どもたちと直接触れ合った経験は何にも換えがたい貴重な学びの時となりました。



結果として、支援や視察をしている側の私たちが逆に励まされる旅となりました。事前学習で疑問に感じていた事柄のいくつかは解決することができましたが、参加したばかりにさらに多くの問いを抱えて帰ってくることもありました。「地の塩、世の光」として、私たちにできることは何なのでしょう。生きるとはどういうことなのでしょう。私たちに本当に隣人を愛することができるのでしょうか。豊かとは、平和とは、命とは、人間らしさとは……疑問は深まるばかりです。

遠い国のお友だち ～CFJの活動を通して～

久 洋子
幼稚園教諭

「せんせい、ほくね、ジャスティンちゃんとノレンちゃんのゆめをみたよ」……2年前、当時年少組だった年長A男の言葉です。秋の子どもフェスタに向けてクッキー作りをする前に、クッキーは年長組が売ること、そのお金は遠くに住んでいる、お金のない友だちに届けるということを話した翌日でした。ジャスティン、ノレンというのは、保護者会がCFJの里親運動で援助している子どもの名前です。

幼稚園ではこの他、園庭に落ちた銀杏や、裏庭に生った柿を磨いて売ったお金を貯めたり、クリスマス献金などでCFJの活動に参加しています。保育者はその都度、それぞれの年齢に応じた形で、困難の中にある子ども

たちのことを話しますが、ただ憐れむのではなく、自分たちに与えられている恵みに感謝すること、今度はその恵みを、困っている友だちのことを覚えて使い、返していくことを大切に伝えています。

昨年度末、CFJフィリピン訪問プログラムでジャスティンを訪問すると伺い、年中組ではプレゼントを作ろうと、「ジャスティンくんへのポスト」を置きました。ポストは「おとこのこだから、きっと、きょうりゅうがすきだよね」などと一生懸命に描かれた絵でいっぱいになり、それを図鑑の形にまとめました。この春、年長組になった子どもたちは、実際に訪問した実習生の話を聴いたり、現地で撮られた家屋の写真を見て驚きつつも、「プレゼント、だいにしてくれているかな?」「ジャスティンくん、かつこういいね」などと話し合っています。3年間を通して、心はすっかり友だちのようです。

Bangladesh 寺子屋訪問スタディツアー

輪 島 達 郎

女子短期大学 教養学科助教授



Bangladeshは、日本人の旅行先としてはほとんど選択されていない国である。観光開発が立ち遅れている上に、洪水の国、貧困の国というイメージがつきまとう。しかしそれゆえにこそ、Bangladeshは旅行するに値する国である。観光地化されていない、したがって途上国の社会問題が覆い隠されていない、素顔のアジアをそこに見ることができるからである。

アジアキリスト教教育基金——以下ACEF(エイセフ)——による「Bangladesh寺子屋訪問スタディツアー」は、アジアの現実を見つめ、豊かさについて考え、日本および自己について思いをめぐらせる絶好の機会を与えてくれる。ACEFは日本のキリスト教系NGOであり、故ミナ・マラカール氏によって設立されたBangladeshのローカルNGOであるBDP(Basic Development Partners)と共働して、貧困地域の子どもたちが働きながら通学できるような寺子屋学校の建設と運営にあたっている。寺子屋訪問スタディーツアーは、春と夏の年2回、これまで31回行われており、女子短期大学からも最近では毎年学生が参加し、教職員もすでに5人が参加経験をもっている。

ツアーでは、首都ダッカやその郊外のプーバイル、農山村地域のネトロコナやボクシガンジなどに設置されているBDPのオフィスでACEFおよびBDPのスタッフたちと寝食をともにしながら、ACEFとBDPが設立した寺子屋学校を訪問し、子どもたちと交流する。多く

の寺子屋をまわるうち、途上国の貧困地域で学校を根付かせることがいかに重大な意義をもっているか、肌で理解できるようになってくる。教師たちと子どもたちの熱心さの背後にある村人たちの期待、農村の豊かでのどかな風景の背後にある生活の厳しさ。旅行者として通過しただけでは見えないものが、現地スタッフたちとじっくり滞在することによって見えてくる。

また、このツアーでは参加者同士によるシェアリングと、聖書をともに読む礼拝が重んじられている。寺子屋で、街で、農村で、それぞれが見聞きし感じたことを分かち合うことによって、単独旅行とは比較にならない豊かな経験がもたらされる。また、この経験のただ中で聖書を読み、祈ることによって、日本からはるばるBangladeshにやってきた自己の使命——神は自分に何を求めておられるのか——に思いをいたさざるをえない。このようにしてこのツアーは、Bangladeshやアジアについての情報をインプットするだけのものではなく、自分の生活や生き方の根源を問い直すよう参加者をうながすものとなっている。

ACEFでは高校生の参加も歓迎している。本学院の高等部生、女子短大生、大学生、院生のみなさんに、ぜひお勧めしたいツアーである。今夏のツアーでは女子短大生が4人参加したので、『青山学報』誌上に近々報告が寄せられるはずである。詳細はACEFのウェブページ(<http://www.acef.or.jp/>)を参照していただきたい。(「アジア子供教育基金」という別の団体が同じACEFという略称を用いているのでご注意願いたい。)



高等部グリーンキャンプ in アジア学院

渡辺 健

高等部教諭



「留学生の人と英語を話さざるを得ない状況になり、勇気を出して英語をしゃべったら、結構通じてとても嬉しかった。」キャンプに参加した一人の生徒の感想です。生徒たちがアジア、アフリカからの留学生と英語でコミュニケーションをとっている姿を見ることは、私自身英語の教員として、このキャンプの楽しみのひとつでもあります。

ここでは4年目を迎えるアジア学院でのグリーンキャンプについてレポートさせていただきます。

〈グリーンキャンプ〉

「くさっ!」(くさい) アジア学院を初めて訪れる生徒の初めの言葉は、その臭いに対するものが多いようです。それが次第に「へー」や「おもしろーい」となり、最後の食事の時などには「もう残せなくねえ?」(もう簡単に食事は残せないよな) などとなっていく、生徒の中に嬉しい変化を見て取ることが出来ます。

“Amazing Grace”というテーマで企画された今年のグリーンキャンプ。生徒19名、OB3名、教員5名、総勢27名で、自然を体験し、驚くばかりの恵みをもたらす神に思いをめぐらせるキャンプとすることを目的としました。キャンプの3本柱は1ワーク、2バイブルタイム、3交わりで、朝晩の家畜の世話、農作物の収穫、日中(午前か午後)の草むしり等がワークの中心です。今年のバイブルタイムは神の創造と、Amazing Graceという曲が作られた背景と救いをテーマに行いました。交わりとしては、ゲーム大会、体験プログラム(今年は初めての鶏肉の燻製作りと豆腐作り)、バーベキュー、キャンプファイヤー等々盛り沢山な内容で、学年、部活を越えた親睦を深めました。

〈アジア学院〉

私たちがお世話になっているアジア学院は、アジア・アフリカの農村地域から農村指導者を招き、9ヶ月間で有機農法等の技術や知識を学ばせ、農村リーダー養成の研修を行っている専門学校です。毎年20～30名(今年度はバングラデッシュ、インド、カメルーンなど16カ国から26名)の草の根で活動する農村指導者が学んでいます。私たちは毎年その隣りにあるセミナーハウスに寝泊りし、1日に4、5時間のワークを体験させていただいています。

〈恵み〉

生徒たちは、普段都会では味わえない多くの体験をしていきます。鳥小屋の担当になった生徒は、「産みたての卵はあたたかい」ことを体感し、豚小屋から出てきた生徒は、糞尿掃除が思ったより大変であったことを報告してくれます。燻製作りに参加した生徒は、スタッフのブッチャリングを実際に垣間見て、たじろいだりもしていました。そしてその夜、バーベキューで鶏肉や豚肉を食べながら、食べ物を簡単には残せない思いになったりするようです。またテレビをまったく見ない生活というのも新鮮なようです。

冒頭で留学生とのコミュニケーションについて触れましたが、生徒たちはこのキャンプ中、教員や日本人スタッフのいない場所での作業で、アジア、アフリカからの留学生とコミュニケーションを取らなければならないことが少なからずあります。面白いのは、英語を母国語としないアジアやアフリカの人と英語で話す時、必要な単語をズバツと言ってしまったほうが通じることが多いことです。流暢な長い英文はかえって混乱を招くことがあるようで、簡単な単語での会話の方がよい場合があります。したがって英会話の苦手な生徒も意外と会話を成立させています。

このキャンプでアジアそのものを体験するような機会はありませんが、このような機会を通して生徒たちがアジアの人々とのコミュニケーションに関心と喜びを持ち、少しでも積極的になってくれたら嬉しい限りです。



『迷っているけど着くはずだ』

塩谷 直也著 新教出版社 2000年

平尾 雅人

幼稚園教諭

『迷っているけど着くはずだ』この本を手にとった時に私はいろいろな感情を覚えます。

人は多かれ少なかれ迷いの中にあると思います。クリスチャンとして仕事をさせていただき日々、様々な事に迷います。それはクリスチャンとしての自分の日々の歩みでのつまずきといった事から、仕事をする上でつまずきなど様々です。この様な迷いの時に聖書は「これだ！」と必ずしも分かりやすい教えを私たちに示してくれるわけではありません。主イエスを信じて祈り求めて歩いていくといった大前提は分かるとしても、悩み迷う時に一人てただ聖書を開いてもなかなか迷いが取り去られない事も経験してきました。

さて、今回紹介させていただく本の著者である塩谷直也先生を私がかはじめて知ったのは、2005年度の学院新年度礼拝のメッセージをお聞きした時でした。

新社会人として学院で働き始めて、初めての礼拝でお聞きした塩谷先生のメッセージは迷っていた私の心に響き、また分かりやすい内容でした。著者は、この本の中で私たちに人としてこの世にこられたイエスの生涯を様々な視点から捉えては語り掛けています。

とくに第二部の12項に渡るメッセージでは、キリスト教の専門書を読み眉間にシワを寄せて深くうなずくというそれよりも、思わず笑顔で納得してしまうそんな印象を持つ内容になっています。

さて、この本の題名についてあとがきで著者は以下のように書いています。「地図を見て分かること。それは自分が迷っているということだ。」街角で地図を開いている人は、自分が迷っていることを周囲に知らせていません。人生の地図「聖書」を開いている人も同



じでしょう。私も聖書を読むことで、自分が迷いの中にいるということが、否めない事実として迫ってきました。

文頭で述べたように私は日々悩みのうちにある者です。しかしこの悩んでいる姿を見られる事を恥ずかしがり隠すことが多く、ともすれば自分に「悩んでなんかいない」と暗示をかけてまで、勝手に自己解決した気になって逃げてしまう事が多くあります。恐らく地図を持っていても迷っている事を知られるのを恐れて開くことさえないでしょう。

この本のメッセージは著者の失敗を赤裸々に書かれている所から読み手にユーモアと共感の気持ちを提供し、それと同時に筆者が全てを神にゆだねて日々を歩んでいる姿が描かれているように感じます。

さらには、人間味あふれる主イエスの姿を捉えたメッセージを通して、クリスチャンは勿論のこと求道中の方にも、より身近な主イエスの姿を思い起こさせてくれるでしょう。

今まで知らなかった主イエスの姿を、自分も迷いの中にあると言われる筆者が語っていく。それに触れる私たちもまた堂々と道に迷っている事を示し人生の地図を求めて聖書を開きはじめる。本書は「迷っているけど着くはずだ」という新たな聖書との出会いへ私たちを導いてくれるそんな本です。

青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料

その16 — 阿部義宗関係史料 —

氣賀 健生

大学名誉教授

「青山学院は250名の教職員が、厳父慈母に代って3,600名の子弟を養育する大家族であり、愛と犠牲と奉仕に充ち満つる所であります」——1933年、青山学院第6代院長阿部義宗は、その就任に当たってこう語り、「あゝ母校、我が青山学院。私はこの学院を心から愛し、自分の全生命をこの学院に捧げ盡さんことは、私の晝夜のひそかなる祈願であります」とその言葉をむすんでいます。

青山学院資料センター所蔵キリスト教貴重文献・史料紹介第16回は、阿部義宗にかかわる史料を御紹介します。(阿部義宗の人物紹介は「青山学報」No.159、No.160「青山学院の歴史を支えた人々」1992年7月、10月参照)



阿部義宗は1886年12月3日、弘前に生まれ、伯父本多庸一(青山学院第2代院長)の創立した弘前教会に於て伝道者としての召命を受け、青山学院、米国ドゥルー神学校、ニューヨーク大学大学院に学んで、母校青山

学院に奉職しました。教師として英語、社会学、神学を教え、研究者としてキリスト教社会学の論文を発表し、青山学院教会牧師、学生寮舎監をつとめ、中学部長、神学部長、院長を歴任し、理事、評議員として経営の責任を負うなど、その生涯はまさに青山学院と歩みを共にしたと言えます。

1939年、メソヂスト教会監督就任に際して青山学院長辞任。1941年、日米戦争の前夜、阿部は日米キリスト教会代表者協議会の日本代表団々長として渡米。平和を求めて全米各地に遊説し、ハル國務長官と会談して平和の条件について合意し、戦争回避の方策を近衛首相に進言、近衛はこれを歓迎しました。これを東條陸相が激怒し、この時から阿部の身边には特高警察がつきまとうこととなります。この年日本基督教団設立総会議長をつとめ、教団設立後、初代の教団総会議長就任を固辞して中国にわたり、中国の教会を援け、日本軍の横暴をいさめ、和解のためにつくしました。戦後は引揚者団体全国連合会々長として奉仕する傍ら、賀川豊彦と

共に日本キリスト教平和協会を設立。文部省顧問として歴代の文部大臣を援け、多くのキリスト教関係事業の理事、理事長として活躍しました。そして、キリスト教学校教育同盟の主事を最後に一切の公職から手を引き、召命の原点に還り、一牧師として会員13人の開拓伝道をはじめました。これが本多記念教会の濫觴です。それから23年、現役牧師として伝道者の生涯を全うし、1980年3月1日昇天。90歳でした。

青山学院資料センターには、阿部義宗の人物と事業を知るべき史料が揃っています。これらのうち、礼拝説教をはじめ、多くの手記、日記等の自筆原稿、履歴書、葬儀関係書類、阿部家のルーツ史料等多岐にわたる史料は、阿部義宗の令息、故義一氏および元慈恵医科大学長の次男正和氏の、当資料センターへの寄贈にかかるものです。これらは当該史料の整理を筆者に委託されたもので、今回この史料紹介を機に漸く整理を終って、当センター所蔵史料として相模原キャンパスの資料室に収められることとなります。以下、阿部義宗資料集として簡単な解説と共に御紹介しますが、それは前述の通り、青山学院史そのものの一側面を如実に語っていると思います。

まず、阿部義宗回顧録。これは1975年ごろ、本多記念教会壮年会有志によるインタビューの録音テープ全10巻及びその速記録です。文字通り阿部義宗一生の回顧談で、本人の声咳に接することができ、大変貴重な記録です。

阿部義宗の礼拝説教原稿は51回分残されています。そのうち35回は青山学院教会の日曜礼拝(1915.12.15～1918.6.16)、14回が青山女学院礼拝(1916.4.9～1918.5.10)でこれは朝の礼拝と夕礼拝とがあります。本多記念教会のものは2回分だけ(1954.12.12、1976.5.30)です。説教題を幾つか掲げておきましょう。「我等の確信の基礎」「年頭所感・都



を指してゆく人に「神の声」「国民の道徳的危機」「民衆と耶蘇」「基督教の家族観」「心の大路」等々です。阿部の英文演説の原稿は6部で、この中には1928年から翌年にかけて欧米出張中に行なわれた“Aoyama Gakuin — For Christ and Country” “Message of A Japanese Christian”と題するものが含まれています。

次に阿部義宗履歴書3通。明治35年3月30日、飯久保牧師から阿部義宗他12人受洗の弘前教会記録のコピー。青森県第一中学校の阿部義宗成績表。また、戦後間もなく書かれたと思われる自筆履歴書には、「功績概要」として次の一文があります。「戦後困窮せる私学の復興のため米国からの援助をうけることに奔走し、基督教学校教育同盟総主事又は理事長の資格において多額の援助金を得ることに成功しその額直接本学院関係の分のみにても9,355万余円に及ぶ。」また、阿部義宗葬儀及び前夜式の式次第、など関連書類がまとめられています。

次に阿部家・本多家のルーツ史料として次のものがあります。(1)知行帳・正徳二年九月。(2)知行帳・正徳三年三月。(3)阿部家由緒書・阿部半次郎宗定作製。その他阿部家の親戚関係等の解説。これらの史料は主として故阿部義一氏の提供されたものです。

次に阿部義宗自身の手記・日記・手紙等次の通り。

- (1) 「みづからのほど」と「他人のほど」——真の「ほどほど」のいみは、と題する手稿。
- (2) 日記(昭和3年3月～昭和4年2月) 外遊中の日記
- (3) エッセイとサイン(阿部・小崎・Browning, Downs)
- (4) 手書き讃美歌解説(部分) コピー
- (5) 渋谷氷川教会建築趣意書・記念礼拝写真
- (6) 阿部牧師より本多記念教会員小畑夕メ宛書簡3通
- (7) 阿部宗定プロフィール・阿部義宗談(朝日新聞青森版)
- (8) Christian Advocate 紙号外—青山学院再建アピール
- (9) 阿部義宗青山学院長就任の辞(青山学報昭和12年3月3日)
- (10) 青山学院学風の樹立・阿部義宗
- (11) 青山学院の今日—特に小学校幼稚園に就



て—

- (12) 阿部義宗氏の社会科学関係蔵書一覧(整本済)

阿部義宗の執筆した雑誌記事等印刷物は次の通り

- (1) アメリカを見たままに(書物春秋・昭和6年)
- (2) イエスと罪の観念の転向(開拓者・昭和6年)
- (3) ユーセニックス論(開拓者・1917年)
- (4) “Japan and Missionaries” (Pastor’s Journal・1941)

阿部義宗に関する諸記事は次の通り沢山あります。

- (1) 本多庸一先生と阿部義宗先生(都田恒太郎説教)
 - (2) 阿部義宗院長(青山学院九十年史)
 - (3) 阿部義宗氏(K・S生「福音新報」昭和9年)
 - (4) ああわが命この学院に捧げん・青山学院長阿部義宗氏(「報知新聞」昭和9年)
 - (5) 阿部義宗先生と教育同盟(キリスト教学校教育・1980年)
 - (6) 好日閑話・阿部義宗氏(東奥日報)
 - (7) 可憐なるセンチ詩人阿部義宗氏(日本メソジスト新聞)
 - (8) 余生を郷土のために阿部義宗さん(東奥日報)
 - (9) 阿部義宗氏を訪ふ(Z・Y生「福音新報」)
 - (10) 青山学院の歴史を支えた人々・阿部義宗(青山学報)
 - (11) 阿部義宗(本多記念教会・シリーズII)
 - (12) 賀川豊彦と阿部義宗(氣賀健生・賀川豊彦学会誌)
 - (13) 阿部義宗論(楠正人・横浜青年・昭和13年)
 - (14) 阿部義宗論(八幡太郎・新興基督教・昭和6年)
 - (15) 阿部義宗先生遺稿(氣賀健生・青山学報)
 - (16) 台湾校友会と阿部義宗先生(青山学報)
 - (17) 阿部義宗先生に関する土合竹次郎牧師の手紙、他
 - (18) ABE New President of Aoyama Gakuin (Japan Advocate)
 - (19) Dr. Abe (Zion’s Herald)
 - (20) Dr. Abe Heads of Aoyama Gakuin (Christian Advocate)
 - (21) Retirement of The Reverend Dr. Abe, God’s Samurai and Servant (Charles Iglehart)
- スペースの関係で、続きは次号をごらん下さい。



日本キリスト教団 中渋谷教会

野宮 恵

大学庶務部庶務課

渋谷駅南改札口から徒歩5分ほどのところに私の通う中渋谷教会があります。桜ヶ丘町という文字通り桜の見事な坂道を登ったところにあり、会社のビルや高層ホテル、専門学校などの間にたたずんでいます。教会の入り口付近には四季折々の愛らしい花々が、私たちをいつも迎えてくれます。中渋谷教会は大学の国際政治経済学部現在の宗教主任嶋田順好先生が7年前まで牧師として長年牧会されていた教会です。平均出席者数は約120名前後です。創設は、1917(大正6)年初代文部大臣森有礼の三男である森明牧師(森明牧師のお子さんに故森有正氏、故関屋綾子氏がおられます)によって、富士見町教会の植村正久牧師の支援のもとに設立されました。現在は及川信牧師が牧会にあたっておられます。

中渋谷教会は都心にあるため遠方から通ってこられる方も多く、また古くからの会員も多いためエレベーターや障害者用トイレ、イヤホン座席の設置はもちろんのこと、電話礼拝システムも早くから整備されてきました。盲導犬も歓迎です。また小さいお子様連れのお子様も安心して礼拝に出席できるよ

うに、教会員有志によるベビーシッターもおります。毎週日曜日は教会学校や朝の礼拝のほかに夕礼拝もあります。夕礼拝は出席者は少数ですが、都会の喧騒を忘れ、とても静かで心の慰められる豊かな礼拝を捧げることができます。そのためこの夕礼拝を好きな人はじつは大勢います。都合により朝の礼拝に行けない時や、渋谷付近に用事でいらした帰り道などにぜひお勧めします。

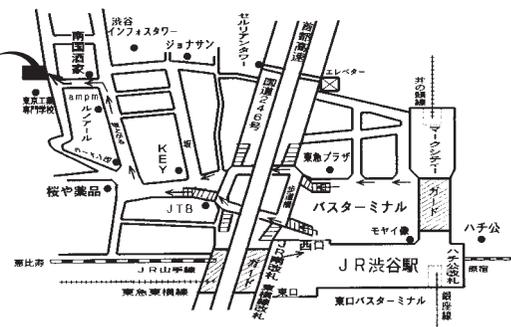
秋はバザーがあり、リサイクル用品・衣料、手芸品、食事・喫茶、古本、園芸、ゲームコーナーなどで盛り上げます。今年は10月最後の日曜日の午後の予定です。毎年近隣の方々も楽しみにしていただきます。

冬はなんとといってもクリスマス・イブのキャンドルライト・サービスの中で上演されるクリスマス・ページェントです。及川牧師のオリジナル脚本・総監督のもと、乳児から大人まで出演します。礼拝堂全体が2,000年前にタイムスリップし、キリストの御降誕を出演者も会衆も一緒に賛美できるように工夫されています(衣装やぬいぐるみは必見)。今年は12月23日の夕方に行います。

以上簡単に私の教会をご紹介させていただきましたが、他にも美しい聖歌隊の奉唱やパイプオルガンの音色など書きたいことはたくさんあります。青山学院に集う方々がお手元の通学・通勤定期を使って日曜日に中渋谷教会にも通ってくださればとてもうれしく思います。



中渋谷教会



日本キリスト教団 中渋谷教会

東京都渋谷区桜丘町8番22号 TEL: 03-3461-7088 FAX: 03-3461-7097
<http://www2.ttcn.ne.jp/~chibuki/naka/ch.html> e-mail: shino-nakas@tbm.t-com.ne.jp

幼稚園 より

1学期の間に、幼稚園の子どもたちはそれぞれに自分の思いを表しながら遊びを楽しみ、お祈りをし、賛美をする毎日をご過ごしながら大きくなってきました。2学期には様々な行事を通して自然に触れたり、仲間と共に楽しい経験をしながら、神様から与えられる恵みに感謝する時を大切に過ごします。

軽井沢キャンプ

9月5日(火)～7日(木)

年長組の子どもたちが親元を離れて、仲間や保育者と共に豊かな自然の中で過ごす3日間です。清々しい緑の中で朝の礼拝を守ります。

敬者の会

9月22日(金)

子どもたちが、おじい様・おばあ様と共に礼拝を守り、幼稚園での一日を過ごします。

子どもフェスタ

10月7日(土)

保護者会主催の、子どもたちのためのお祭りです。全学年の子どもたちがクッキーを作り、年長組が販売します。収益はチャイルド・ファンド・ジャパンに届けられます。

収穫感謝祭

11月17日(金)

秋の実りを感謝する礼拝を守った後、収穫物を学院内の日頃お世話になっている方々に届けます。神様が与えてくださる恵みを分かち合います。

アドヴェント礼拝

11月24日(金)、12月1日(金)、8日(金)

クリスマスを迎える準備をしていく大切な期間を過ごします。

クリスマス礼拝

12月15日(金)

聖誕劇を中心とした礼拝を守り、保護者の方々ともにイエス様の誕生をお祝いします。学院内にキャラリングに出かけ、クリスマスの喜びを伝えます。

(教諭 生沼晴美)

初等部 より

初等部の新しい礼拝堂の建設が始まりました。完成は2007年3月の予定です。9月第2週より礼拝堂のない期間を過ごします。これを一つのチャンスと捉えて、様々な形式の礼拝にチャレンジします。

教職員退修会

8月31日(木)～9月1日(金)

「静聴と傾聴」というテーマで、御殿場東山荘にて

行われました。講師に嶋田順好先生をお迎えし、聖書の御言葉を中心に学びをしました。

礼拝堂へ感謝する会

9月6日(水)

1964年に献堂されてから42年間、初等部の礼拝を行ってきた礼拝堂にお別れをしました。まず、パイプオルガンとステンドグラスが移設のために取り外され、解体されます。

(宗教主任 小澤淳一)

中等部 より

伝道週間礼拝

6月5日(月)～9日(金)

伝道週間礼拝に日本基督教団青山教会の増田将平牧師をお招きしました。創世記から「私たちは神の作品」、「人を生かす神」、「私たちを見出してくださる神」と題して説教をしてくださいました。

緑蔭キャンプ

7月21日(金)～23日(日)

今年も高等部の追分寮で、聖書の学びやナイトハイクを通して交わりを深めました。23日の主日礼拝を日本基督教団軽井沢教会で守ることができて感謝でした。

高中合同研修会修養会

9月1日(金)

講師は上智大学名誉教授のアルフォンス・デーケン先生です。

ゴールデン・ウィーク明けから毎週水曜日のお昼休みに、有志で交わりの時を持っています。一緒にお弁当を食べ、ギター伴奏でゴスペルソングを歌い、聖書を読むという集まりです。とても恵まれた集まりになっています。

(宗教主任 西田恵一郎)

高等部 より

特別礼拝

5月10日(水)

高等部では毎年5月に特別礼拝を行っていますが、今年は10日(水)、講師に東京バプテスト教会牧師のクリス・マッコトリー氏と教会ゴスペルクワイアー7人を招いて礼拝を行いました。マッコトリー牧師の力強いメッセージ“Welcome to the story of God”を与えられ、またクワイアーのリズム感あふれる素晴らしいゴスペルの賛美を共にすることができました。

伝道週間礼拝

6月19日(月)～23日(金)

講師に全国各地を伝道しているアーサー・ホーラン

ド氏をお招きしました。元レスリング全米チャンピオンのアーサー氏は話題豊富で生徒の関心を惹き付け、キリスト教信仰による魅力ある生き方を3回に亘って力強く語って下さいました。“You are loved”というメッセージは生徒の心に深く刻まれました。

グリーンキャンブ

7月22日(土)～24日(月)

今年のグリーンキャンブは昨年に続きアジア学院(栃木県西那須野)で7月22日～24日に行われました。アジア学院は農村指導者養成専門学校で、アジア各国からの留学生が30人程学んでいます。ここで私たちも農業、養鶏、養豚等食べ物にかかわる作業をさせてもらいました。私たちも20人ほどの生徒が参加し、今年は“Amazing Grace”をテーマに、礼拝を中心にした交わり、またアジア学院留学生との交流、農業経験他、貴重な体験を得て帰ってきました。

(宗教主任 坂上三男)

女子短大 より

ランチタイムコンサート

10月17日(火) 12:30～13:20 青山学院講堂

演奏：洗足学園音楽大学打楽器アンサンブル

青山祭開会礼拝

10月28日(土) 9:30～ 女子短期大学礼拝堂

後期チャペルコンサート(青山祭)

10月28日(土) 13:00～15:00

女子短期大学礼拝堂

演奏：短大聖歌隊、短大ハンドベルクワイア、ゴズベル、大学第二聖歌隊

青山祭 天使の喫茶

10月28日(土)、29日(日)

チャリティー喫茶室および展示

創立記念礼拝

11月15日(水) 12:30～13:00

説教：深町正信(院長)

いずれも、どなたでもご参加いただけます。

(宗教活動委員 西願広望)

大学 より

特別講演会

「東ティモールの現状と私たちにできること」

7月4日(火) 青山キャンパス

伊藤洋子氏(経営学部卒業生)

ケンブリッジ大学

セント・キャサリンズ・カレッジ聖歌隊演奏会

(青山スタンダード特別講座)

相模原：7月6日(木)、青山：7月7日(金)

ジャワ島ジョグジャカルタ地震災害被災者義援金として合計173,536円の席上献金が献げられました。

清里サマーカレッジ

8月1日(火)～3日(木) 大学八ガ岳寮

吉村和雄先生(キリスト品川教会牧師)

「神さまからのEメールー便利社会の幸せさがしー」

(参加94名)

バッハ・コレギウム・ジャパン演奏会

(青山スタンダード特別講座)

10月14日(土) 15:00 ガウチャー記念礼拝堂

(宗教センター事務局 平野修一)

本部 より

おーる あおやま あーとてん '06

6月27日(火)～7月7日(金) 短大ギャラリーー

「創造の完成」

学院宗教委員研修会

11月16日(木) <創立記念日> 10:00～

第19会議室(総研ビル11階)

講師：藤本 満先生

(インマヌエル高津キリスト教会牧師)

(宗教センター事務局 平野修一)

編集後記

人との出会いは私たちに多くの恵みを与えてくれます。他者と出会い、実際に見たり、聞いたり、触れ合うことによって得た気づき(知識や知恵)はもちろんのこと、心で感じたことは、その後長きにわたって自己の生活の中でより良く生かされていくことでしょう。今号では各部から様々な国際交流の報告がなされました。幼い子どもたちの心が、健やかな成長を続ける生徒・学生たちの心が、大人たちの心が、交流を通して豊かにされたと感じます。イエス・キリストによって結ばれた私たちは、アジアに目を向けて一全世界の仲間と共に平和を願い、信仰の道を歩みたいと思います。(生沼晴美)

Wesley Hall News 第89号

発行 青山学院宗教センター 宗教部長 東方敬信
東京都渋谷区渋谷4-4-25
TEL.03-3409-6537 (ダイヤルイン)
URL.<http://www.aoyamagakuin.jp/rcenter/index.html>
E-mail.agcac@jm.aoyama.ac.jp
編集 ウェスレー・ホール・ニュース編集委員会
印刷 万全社